拡大教科書や拡大補助具等に関する視覚障害特別支援学校の教員を対象とした意識調査

中野 泰志（慶應義塾大学）　　共同研究者：新井哲也・山本亮

【問題の背景】「障害のある児童及び生徒のための教科用特定図書等の普及の促進等に関する法律」が施行され、拡大教科書等の給与実績は飛躍的に増加。この法律を全ての書籍に適応すべきだという意見がある一方、児童生徒の発達段階、特に、社会参加を考慮した場合、拡大補助具のリテラシーも重要だという意見も出てきている。

2004 年度：4,421 冊（538 人）
2005 年度：8,949 冊（604 人）
2006 年度：11,298 冊（634 人）

目的

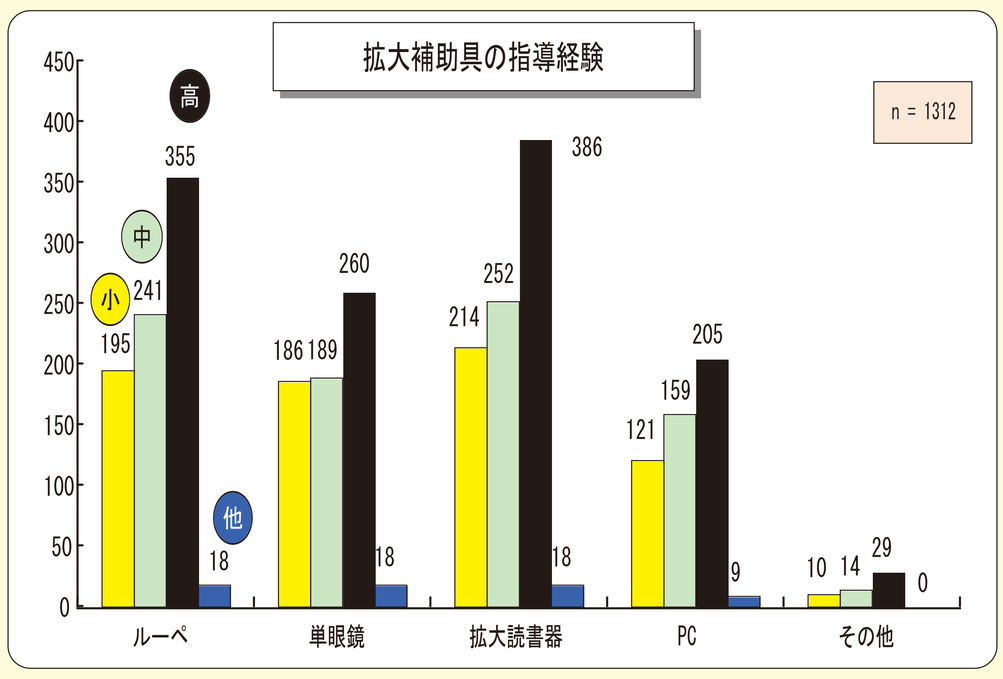
卒業後や進路等の発達段階を考えた場合に、拡大教科書や拡大補助具をどのように使うべきなのであろうか？本研究では、拡大教科書や拡大補助具に関して、視覚障害特別支援学校（盲学校）の教員がどのような意識を持っているかを調査した。

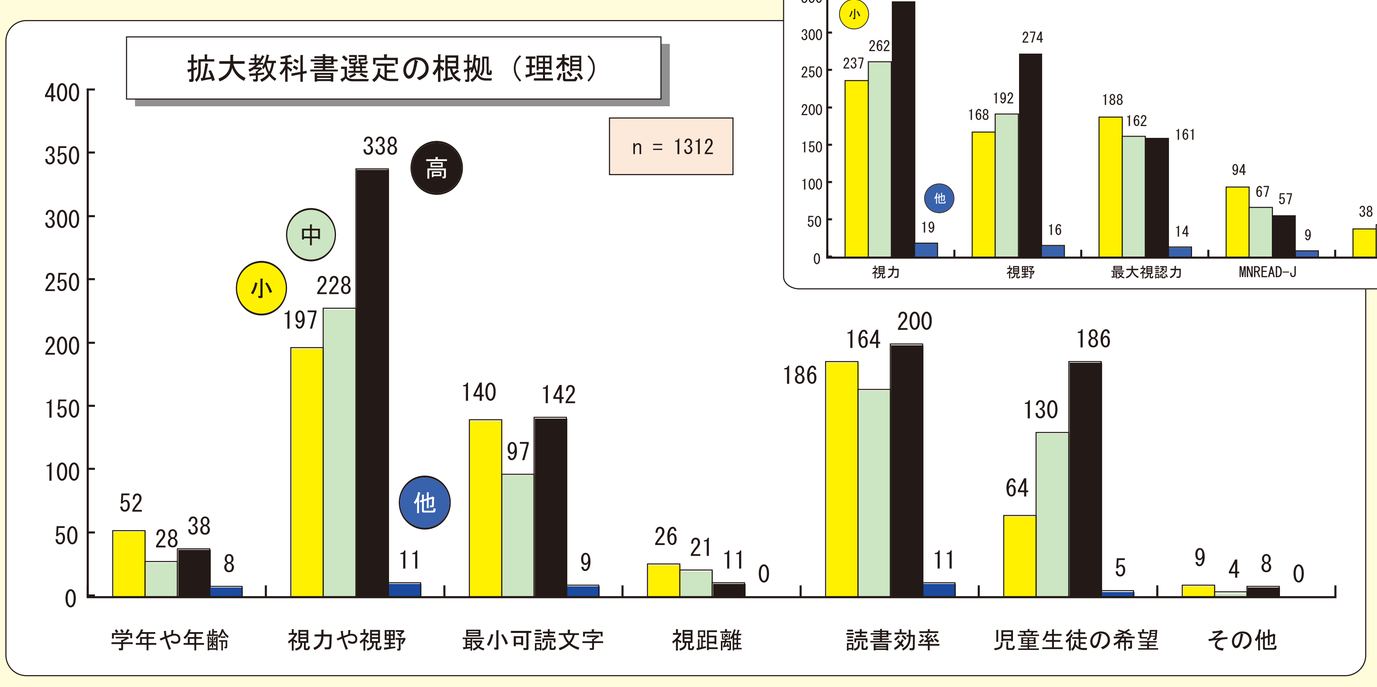
方法

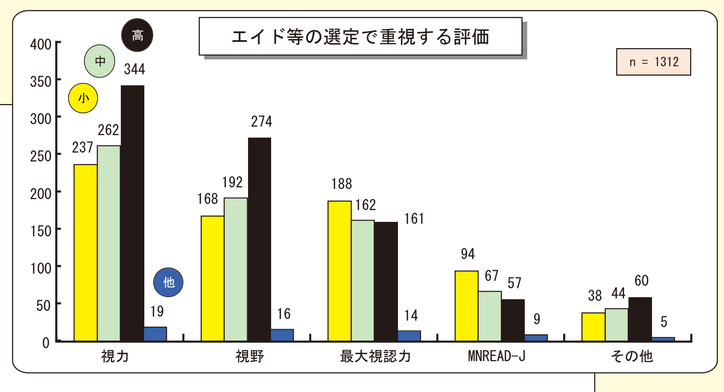
盲学校の小・中・高等部で児童生徒の教科指導に直接にかかわっているすべての教諭に対して、郵送方式によるアンケート調査を実施。全国の盲学校 68 校に調査票を発送した。

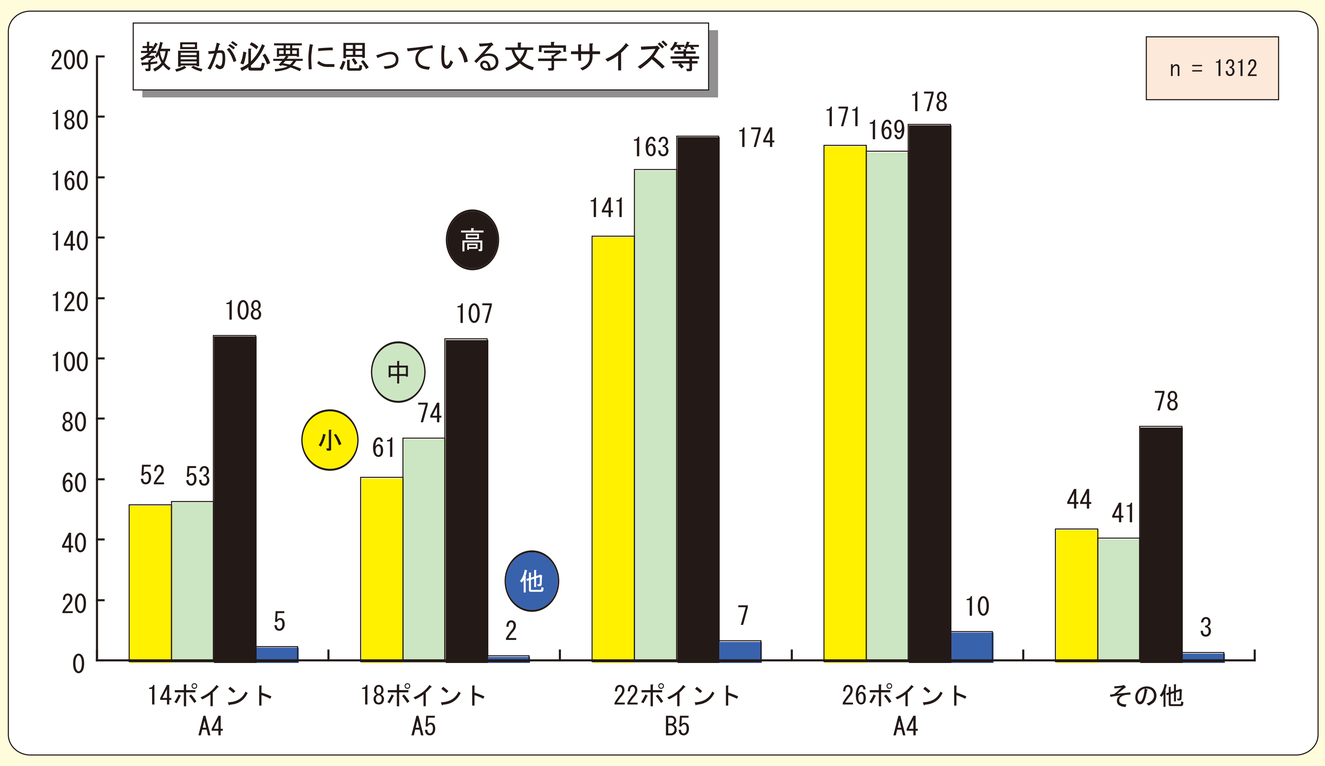
結果

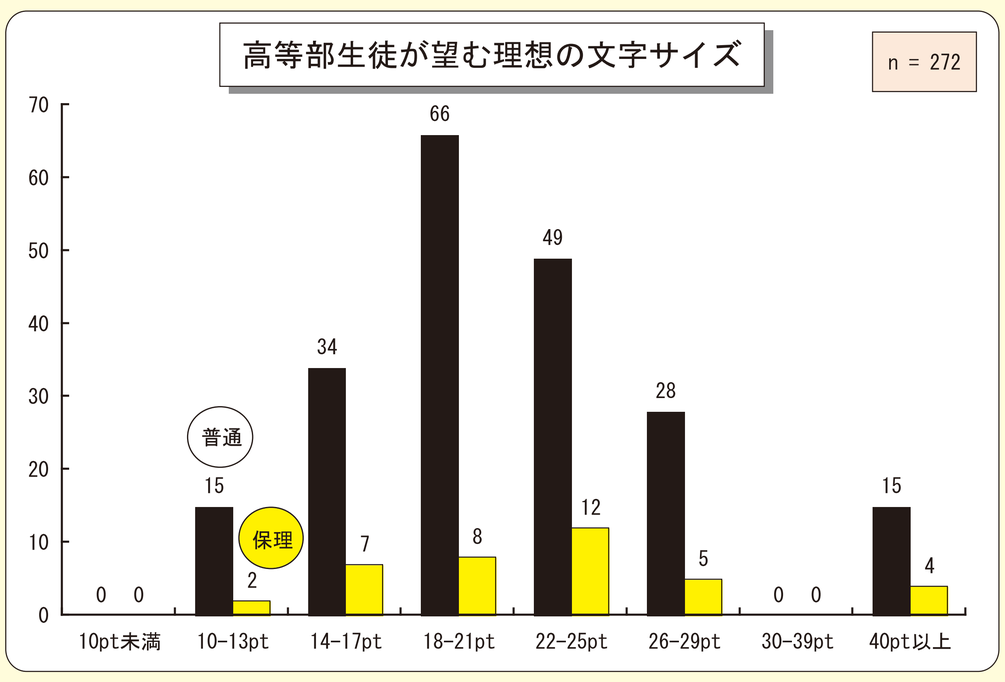
調査票を発送した 68 校すべてから返送があり、1,312 件の有効回答が得られた。所属学部は、小学部が 376 人、中学部が 384 人、高等部が 543 人、その他が 36 人であった。



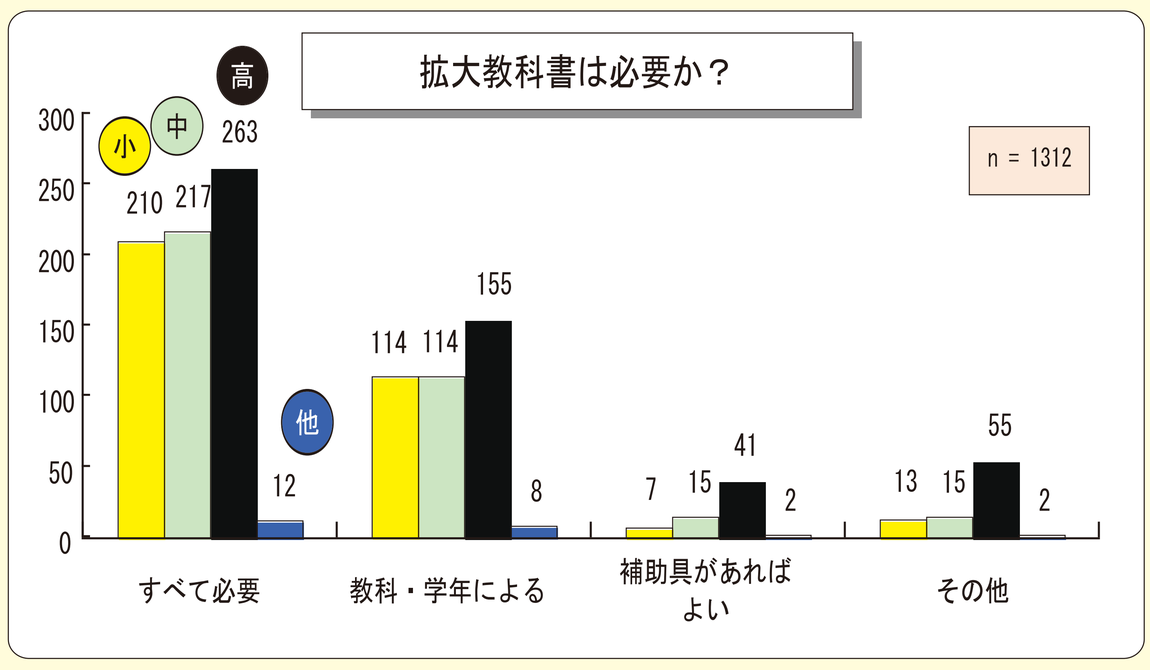


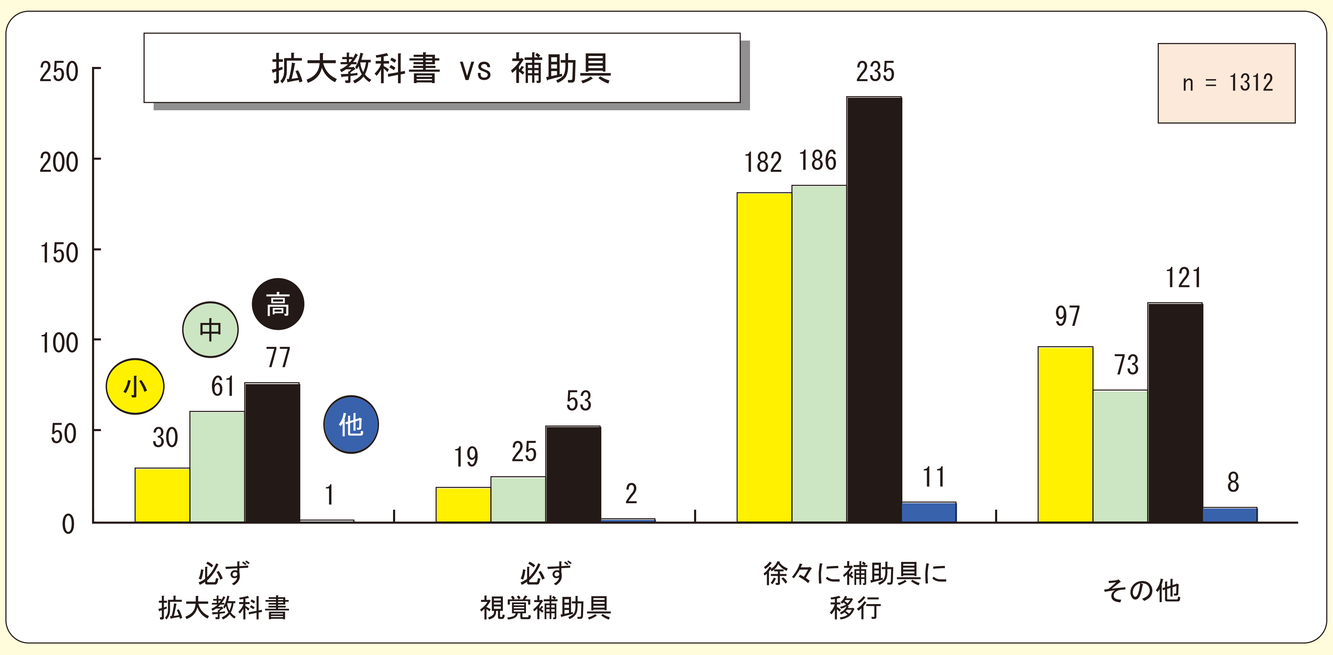






＜生徒のニーズと不一致＞





結論

- 盲学校の教員はエイドの選定・利用の必ずしも専門家とは言えない！
- 理想と考えている評価方法が必ずしも出来ていない！
- 生徒のニーズと教員の意識の間にズレ → 評価法の必要性あり！
- 拡大教科書は、発達段階、特に、学校卒業後も考えて検討する必要あり！